



## 戦後80年・軍事機密を知る

登戸研究所→小田急線・「生田駅」南口より徒歩15分

明治大学「登戸研究所」の正式名称は、「第九陸軍技術研究所」ですが、開発内容を知られたくない為、秘匿名「登戸研究所」と呼ばれていました。

1950年登戸研究所跡地の一部を明治大学が購入しました。

現在の明治大学生田キャンパス内にあり、当時のまま現存する建物です。



1941年建設・堅牢な造りで、窓はアルミサッシに変えられていました。



《内部には第一から第五展示室があります。》

### ◆第一展示室　登戸研究所の全容◆

11万坪の敷地に100棟の建物があり、約1000人の人が働いていました。

陸軍中央、陸軍中野学校、憲兵隊との結び付きが強く、戦時中は大本営の中核となっていました。

参謀本部の指導下にあった登戸研究所は、政府の方針にしばられることなく、自由に、秘密戦の研究ができた。(後、731部隊と連携して中国南京で人体実験も行いました。)

1942年に使った金額が679万円、当時200万円あれば飛行機工場が立つそうです。

陸軍の研究所10ヶ所のうち最大の予算が配分され、期待されていました。

### ◆第二展示室　風船爆弾と第一科◆

風船爆弾は、アメリカ人は牛肉を食べるので、食料危機を狙い、牛を殺傷する牛疫ウイルスという生物兵器の散布が目的でした。しかし報復を恐れ実際には搭載されませんでした。気球内を水素ガス60%程で放球、外気の気圧が低下してガスが膨張、上昇し続けるとガスが放出、偏西風にのり東へ。夜の気温低下で高度が下がり高度維持装置

の働きで、砂袋を投下し始め、高度が回復すると、投下が止まり、2昼夜半でアメリカにたどり着きます。爆弾や焼夷弾を投下とあります。オレゴン州で不時着した風船爆弾に触れて6名が死亡。以降、着弾情報は日本に入らず。

風船爆弾とは？

風船爆弾構造解説

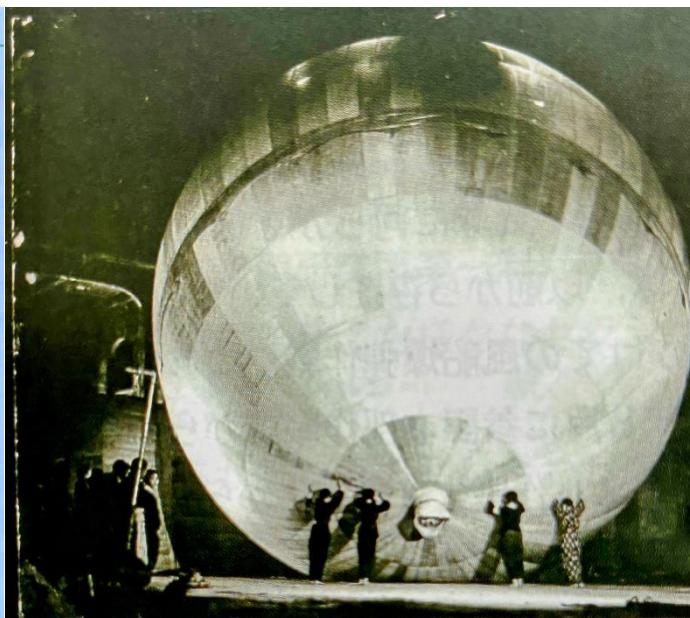


気球内部には水素ガスが充填されました。

気球部は、専用に開発された気球紙と呼ばれる和紙をこんにゃく糊で貼りあわせて作られました。

砂袋も和紙で作られ、放球基地近くの砂浜から採取された砂が入れられていました。

懸吊部は、砂袋などを含めた高度維持装置と焼夷弾あるいは通常爆弾などの兵器からなっていました。



風船爆弾製造の様子② (林えいだい氏所蔵)

1個につき3000枚の和紙を使用  
直径10mの気球を1万発整備する。  
アメリカ大陸に1000発以上着弾と推定

## ◆第三展示室 秘密戦兵器と第二科◆

生物兵器、毒物、スパイ機材の研究を行い、開発された兵器は陸軍中野学校で使用。

諜報：情報の信頼性、正確度を分析活用

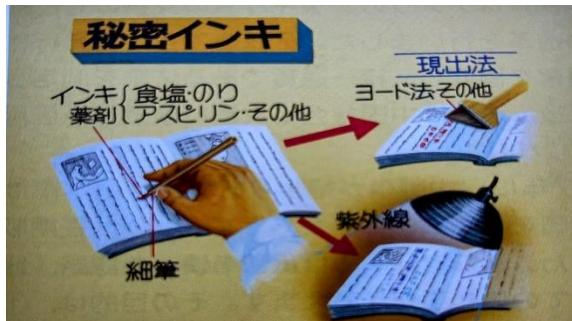
謀略：秘密工作、偽装工作を行う。

防諜：敵国のスパイを探知すること。

宣伝：事実を曲げて言いふらすこと。

第二科組織表

班	中心メンバー	研究内容
庶務班	滝脇重信技術大尉 (班長)	
第1班	伴繁雄技術少佐 (班長) 長谷技術中尉	秘密インキ・オブラー紙・風船爆弾 (材料研究)・気圧信管・焼夷剤・毒物など
第2班	村上忠雄技術少佐 (班長) 滝塚薬剤大尉	毒物合成 (蛇や植物が持っている毒を実用化できるように)・え号剤など
第3班	土方博薬剤少佐 (班長) 小堀技術中尉	毒性化合物・青酸化合物 (青酸ニトリル)・耐水マッチなど
第4班	黒田朝太郎軍医中尉 (班長)	細菌 (炭疽菌)・対動物用細菌・各種毒物など
第5班	丸山政雄技術少佐 (班長) 大野技術大尉	秘密カメラ (ライター型・マッチ型・ステッキ型・カバン型・ボタン型)・特殊カメラ (遠距離撮影用・夜間撮影用・水中撮影用・暗視装置 (あ号)・超縮写器材 (マイクロドット)・感光材料など)
第6班	池田義夫技術少佐 (班長) 米原技術中尉 松川仁技術	対植物用細菌 (小麦条斑病菌)・土壤破壊菌 真菌・昆虫 (ニカメイチュウ) など
第7班	久葉昇獣医少佐 (班長) 荒井技術中尉	対動物用細菌 (牛痘ウイルス) など

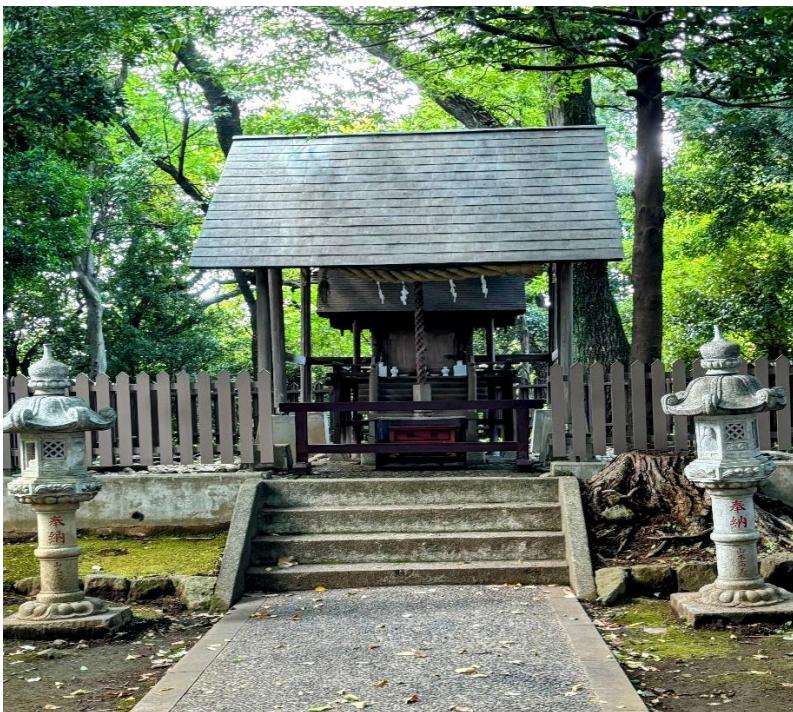


登戸研究所で開発したスパイ兵器 (伴和子氏寄贈)  
特殊な光を照射すると文字が現れる「秘密インキ」など  
スパイが扱う兵器を開発していた。

赤矢印の伴氏（「陸軍登戸研究所の真実」の著者）は、1943年陸軍技術有効章を受章し、賞金で「弥心神社」と動物慰靈碑を建立しました。

現在、明治大学の一角に「生田神社」として佇んでいます。

手記には、中国で関わった青酸ニトリルの人体実験の事実と心境が記されています。



(四)

帝銀事件を捜査した  
甲斐文助氏の手記より

捕虜は、マルタと呼ばれ、  
科学者も物扱いをしていました。  
エントランスで、ビデオの  
視聴があり、人体実験中の  
おぞましいカラー映像には  
目をそむけました。

（四）

実験を始めた  
初めは厭であつたが馴れると一つの趣味になつた  
(自分の薬の効果をためすために)  
相手は  
支那の捕虜を使って  
相手が試験官を疑うので偽装して行なつた

紅茶の中に  
青酸加里を入れて呑ました場合

試験官と一緒に  
俺が先に呑んで見せるから心配しなく  
ともよから呑めと云つてやつた  
捕虜の分のは予め茶碗に満たさせておく  
又は給仕が予め茶碗に入れて来て  
各自に出てくれる(入れない印のあるのを  
捕虜に与える)

斯様にして呑ませた  
注射は  
万年筆様でキャップをとると  
針が出る その針で着物の上から刺す  
よくな仕組となつていて  
之は主としてハブの毒  
一呼吸で倒れる

## ◆第四展示室 偽札製造と第三課◆

偽札を作りインフレを狙い、中国経済を混乱させ、中国の物質を購入するのが目的です  
国際法に問題になる為、戦中、戦後「秘密の中の秘密」で所長と三課関係者のみの出入りと建物の回りは、高さ 3m の板塀で囲まれていました。

偽  
造  
法  
幣  
の  
製  
造  
工  
程

偽札仕上げ  
古札仕上げは、偽札製造に特有の工程です。新札を使用すると不自然に思われるため、紙幣をわざと古く見せるように偽装していました。

梱包  
中国式に梱包し、偽札だと気が付かれることがないようにしました。

印刷  
印刷の工程では、イリス凸版輪転機が使われました。この輪転機は大量印刷が可能で、登戸研究所に4台導入されていました。

印刷  
印刷工程では紙幣に通し番号を入れる作業があります。付番機を外注すると偽札を刷つて発見する可能性があります。そのため数字が付かれていない番号機を購入し、自分で番号の活字を彫っていました。さらに、敗戦近くになると本物の法幣の番号印字が乱雑になってしまったため、それと同じように見えるものをつくる必要も出てきました。

イリス凸版輪転機 (大島康弘氏寄贈)

日本軍による偽札製造に弾みをつけたのが、香港占領 (1941年12月)による法幣印刷工場接收とアメリカ商船拿捕 (捕獲)です。日本側はこれによって印刷機・原版・未完成の法幣と資材を押収し、「ほんもの」の法幣を製造できるようになりました。

## ◆第五展示室 敗戦とその後の登戸研究所◆

戦局が悪化し天皇、軍、政府機関などが、長野県松代へ移転。登戸研究所も、長野県上伊那地方、北安曇地方に移転する。疎開先での本格的な研究活動が、行われる前に敗戦する。

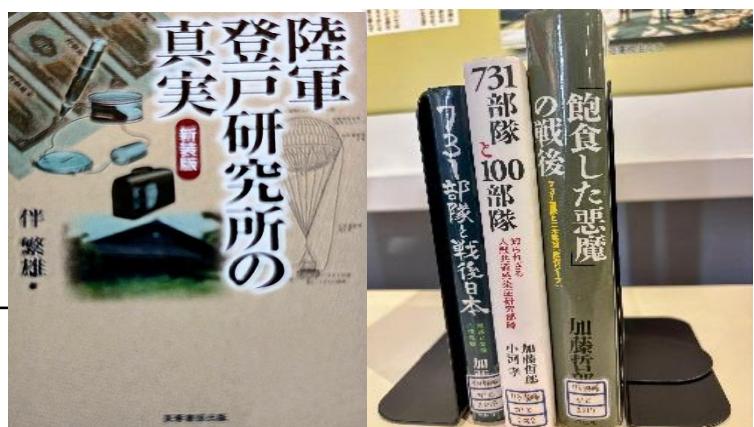
- ・証拠隠滅・解散…1945年8月15日陸軍省から証拠隠滅の為の極秘命令が出され、登戸研究所は、機密文書、兵器等の徹底的隠滅作業が行われました。
- ・軍事機密を接收…GHQによる登戸研究所関連施設の接收
- ・召喚…登戸研究所関係者は、GHQに召喚され尋問調査を受けます。アメリカは、旧日本軍による研究情報の獲得を目指していました。
- ・協力…登戸研究所の関係者による米軍への秘密戦・謀略戦の技術提供がされ、それらが、朝鮮戦争に使用されたと言われています。
- ・免責…米ソ対立中、米への情報提供と引き換えに 731 部隊と登戸研究所関係者の免責が決定。化学戦・細菌戦の製造に関わった人も訴追されませんでした。

(上記の写真撮影は禁止でした。)



石井式濾水機濾過筒

野戦における飲料水確保の為、石井731部隊長が開発。  
大量に、伴繁雄氏の裏庭から発見。  
「軍事秘密」の文字が刻印されています



登戸研究所に行く前に、伴繁雄氏の「陸軍登戸研究所の真実」を読み、心が、重くなりました。日本政府は、中国での毒ガス兵器、154000 発を回収して3億円支払っていますが、中国全土の処理は、見通しがたっていない。現在、南典男氏らが NPO を立ち上げ、被害者の支援をおこなっています。

6年生 小山久仁子

登戸研究所パンフレット、展示室、伴繁雄「陸軍登戸研究所の真実」より引用